

地域資源の磨き上げで 着地型観光を活性化

肱川とともに生きてきた 大洲市の特質

伊予の小京都・大洲市は風光明媚な土地柄で知られている。同時に四国外からの旅行者が、大洲市などの南予地方に向かう際の代表的コース、県都・松山市(ＪＲ松山駅)経由で走るＪＲ予讃線の沿線風景も格別だ。

このルートはＪＲ四国の人気観光列車『伊予灘ものがたり(土日運行、松山～伊予大洲間、松山～八幡浜間)』も運行することで知られる。美しい車窓風景を愛でながら愛媛の特産物を活用したグルメを味わい、大洲などの個性的なまちでの観光も楽しめるこの観光列車は、乗車率が常に8割前後に達する人気だという。

ＪＲ予讃線は松山駅から主に海沿いを約70分間走り、伊予長浜駅に到達すると内陸部に入る。そこから肱川(二級河川)沿いを

伊予大洲駅へと向かうのだが、車窓に展開する肱川の流れは実にゆったりしている。雄大な海岸線の風景から山水画的な優しい川の風景へと、旅行者は一気に趣の違う世界に導かれる。

この普段はゆったりと流れ、時に暴れ川にもなる大河・肱川こそは、大洲市のまさに象徴だ。景観的な意味合いばかりでなく、大洲の最初の本格的まちづくりが始まった戦国時代(当時は大津と呼ばれた)以降、現代に至るまで400年以上も繰り返されてきた幾多のまちづくりに際し、肱川は常に核になってきた。

「大洲はかつて大津と呼ばれ、肱川の流れが大きく湾曲する大洲城の周辺は肱川の川港、つまり物資の集散地としての役割を昔から担ってきました。それは大洲に鎌倉時代末期から武将たちが拠点を築いてきた大きな理由の一つでもあります。さらに大洲城がそびえる肱川と久米川(肱川支流)の間の洲の



ひろし しみず
清水 大洲市長

ような地形にある標高40mの小高い丘(地藏ヶ岳)、これが守るに易く攻めるのに難しく、築城するのにもってこいの場所だったということも大きかったでしょう。当時の大洲の中心はまさに肱川の大きな洲ともいべき地域であり、津(川港)を中心に、古来、まちづくりのしやすい多彩な条件があったのだと思われまます」

そう語る清水裕・大洲市長は、肱川沿いに展開する大洲市の特質を「人の生活と川が



地蔵ヶ岳上にそびえる大洲城(肱川橋から遠望)

非常に近いまち」とも表現する。城下町が代
表する江戸時代の人口集積地や周辺では、川
の流路を人の生活しやすい形に直し、新田開
発や物流ルート確保、水害回避のために流
路そのものを付け替える工事などが頻繁にな
された。

「ところが地形的な難しさもあり、肱川は
それができなかった。近代以降は少しずつ治
水事業を実施してきましたが、肱川は今も、
一級河川としては古来の流路がかなり維持さ
れている珍しい事例です。しかも平野部でな



昭和10年建設の開閉式・長浜大橋(肱川河口部・長浜地区)は近代化産業遺産・
国指定重文のW指定

く大洲盆地を流れ、周囲から多くの支流が集
まっているため、洪水被害が出やすい。特に
大洲盆地から河口部に向かう下流部は最後ま
で両岸に山が迫り、いったん水が出るとなか
なかにはけのない地形です。大洲市がここ10年間
だけでも3回の大きな洪水被害を受けている
のはそのためです。代わりに昔ながらの自然
河川の素晴らしい景観、鵜飼や河原のいもた
き(藩政時代から伝わる里芋を使用した伝統
料理)などの古い河川文化を今も地域に残す
要因になっているのです」

清水市長は県外の出身だが、もともと土木
工学のスペシャリストで、国土交通省職員時
代には肱川上流の山鳥坂ダム(旧河辺川ダム)
工事事務所長を務めた経験を持つ。肱川には



在来工法で木造復元された大洲城天守は歴史界注目のマト

ひとしお愛着があり、河川としての肱川の特
質にも詳しい。
それだけに平成21年9月の就任以来、市長
として肱川を文化的・地形的な核とする大洲
市のまちづくりを牽引することになった経緯
には、「改めて強いご縁を感じています」と感
慨を込めて語る。

TMO方式で観光活性化

清水市長が語った、肱川の昔ながらの素晴
らしい景観、鵜飼やいもたきなどの河川文化
にとどまらず、画期的な天守の木造復元がな
された大洲城、旧藩主別邸跡を明治時代に全
面的に生まれ変わらせた臥龍山荘(県指定文



昭和40年代に観光行事化した「いもたき」(日本3大芋煮)のルーツは藩政時代



肱川上流で合流する支流・河辺川にある8つの屋根付き橋のひとつ「御幸の橋」(県指定民俗文化財)



中心市街地(大洲地区)と肱川を隔てる堤防入口

では実施できないものが多い。その役割はいわゆる「まちづくり三法」が成立した平成10年以降、「中心市街地活性化基本計画」が策定される流れの中、各地に設立されたTMO方式による第三セクターのまち

化財、ミシラン・グリーンガイド・ジャポニー1つ星)、江戸時代から明治・大正・昭和前半期の遺構が混在するレトロモダンな町並みなど、大洲独自の歴史文化を物語る地域資源は多い。これらの地域資源は皆、肱川の存在抜きには生まれなかったものでもあるが、同時に大洲市が近年展開し、成功を収めている「着地型観光」の重要なコンテンツともなっている。

ご承知のように着地型観光は、旅行者主導による観光コンテンツが丸ごとパッケージ商品として準備・提供される「発地型」、つまり外部の発想で生み出された観光メニューと対極的な、旅の目的地(現地)側が主導し、開発・構築する地域密着型の観光メニューと

して実施される。従来のお仕着せの観光に飽き足りない消費者に目を向けた、合理的な観光振興策である。

しかしこれを成功させるには、地元側が「体験してほしい地域の魅力」を自力で発掘し、磨き上げる必要がある。それを旅行者のシビアな目を満足させる商品に育て、提供するノウハウ、それを生かすための仕組みづくりが求められる。旅行者が観光客を連れてくるのを待つ受け身型でなく、旅行者に顧客を連れて来させたくなるような魅力を地域が構築し、効果的に発信し続けるなどの実務能力が総合的に要求される。

着地型観光を成立させる各種作業は、ツアーエージェントの役割など行政機構の枠内

づくり会社などが担うケースが多かった。大洲市でその中心的役割を担ってきたのも第三セクター「TMO(株)おおず街なか再生館」(以下、街なか再生館)だ。

街なか再生館は平成14年、大洲市50%、民間事業者50%の出資比率で設立された。観光エリアの中心地(大洲地区)に立地、観光客受け入れの窓口的役割を果たす『大洲まちの駅あさもや』(各種物販施設、観光案内所、軽飲食、トイレ、駐車場など)を管理。当初は地元商店街との有機的関係性構築など基礎固め作業などにも追われたが、平成16年開催「えひめ町並み博2004」(以下、町並み博)参画により、着実なステップを刻むことができたという(同社代表取締役専務・河野達郎氏談)。



市民有志の発案で平成11年から始まった昭和30年代風定期市「ポコベン横丁」



女性たちのコミュニティ組織「おおず赤煉瓦倶楽部」が運営する「おおず赤煉瓦館」(明治34年築の元銀行)



大洲観光の出発点とゴールを兼ねた「まちなか駅あさもや」(街なか再生館運営)

「着地型まちづくり」を醸成した 市民協働の系譜

町並み博(愛媛県主催)は平成16年4月から10月までの186日間、大洲市・内子町・宇和町(現西予市)を中心とする南予地方で開催された観光振興イベントだ。「十町十色」をキャッチフレーズに、それぞれの地域資源の掘り起こしと磨き上げを行い、個性を生かした「観光まちづくり」の独自メニューを展開して、多くの訪問者を呼び込んだほか、「第1回日本イベント大賞」を受賞するなど、高い評価を受けた。

街なか再生館が進める着地型観光メニュー

(商品)の最新の成果としては、例えば2泊3日で参加費1人約25万円、37万円、移動は定員2名の専用ハイヤー(添乗員付き)で行うJT Bの国内最高級旅行プラン「琥珀」に採用された《翁旅》が挙げられる。

《翁旅》のメニューは、脇川遊覧と市内高級料亭での昼食、臥龍山荘の観覧、大洲の町並み散策など(計210分〜240分)が組み合わせられ、夏季には脇川での鵜飼見学も含む。食事や観光のための立ち寄り先、宿泊施設やその備品に至るまでサービスのすべてに「最高級」「最上級」のもてなしを謳うこの旅行プランに、自力開発したメニューが採用されたことは、いかに大洲市の着地型観光が魅力的かを如実に物語っている。

これは一例に過ぎないが、大洲市の着地型観光は、各種の事例集などで必ずといっていいほど「成功事例」と紹介されるまでに発展している。能力不足や足並みの乱れなどから失敗に終わる地域も多い中、何がほかの地域と違うのか。その特徴は何であるのか。清水市長はその背景として、長年にわたって展開されてきた官民連携、市民協働の取り組みを挙げていく。

「大洲市には中心市街地活性化基本計画の策定(平成12年)の前後から、官民連携、市民協働による地域活性化のさまざまな活動実績が蓄積されてきたことも見逃せません。そうした土壌の醸成と街なか再生館の設立などは同じ線上にあるといえます」(清水市長)

代表的な事例としては、まず平成9年、女性たちのコミュニティ組織「おおず赤煉瓦倶楽部」が明治時代の町並みで人気の「おはなはん通り」(大洲地区。昭和41年にNHKで放映された朝ドラ第1弾「おはなはん」のロケ地)



臥龍山莊は大洲の宝
 臥龍山莊は、大洲の宝を借景に考えられる限りの贅と意匠を駆使した



近くに建つ「おおず赤煉瓦館」(市有形文化財)の管理に携わるようになり、集客施設、市民の憩いの場としてそのイメージを一新させた。

平成11年には赤煉瓦館横に、昭和30年代の懐かしの町並みを模した定期市「ポコペン横丁」(毎月第3日曜)がやはりコミュニティ組織「大洲まぼろし探偵団本舗」主催で始まった。また同年には脛川流域の保全活動団体「脛川流域会議・水中めがね」、平成15年には脛川周辺の清掃や花の植栽などを行う「脛川を美しくするお花はん」が発足し、

活動を続けている。

こうした市民主体の地域活性化の取り組みが、着地型観光が発展する大きな基盤になっていることは間違いない。実際、旧大洲市市制50周年記念事業として、平成16年に竣工した大洲城天守の木造復元も、熱心な市民運動にも支えられたものであった。

その一方で、大洲の観光従事者の意識の高さも特筆に値する。私もガイドの方々から、大洲城や臥龍山莊など、観光資源の説明を受けたが、その知識の深さ、説明の巧みに感心させられた。

そうした市民を含めた関係者の努力の積み重ねの上に、平成23年には臥龍山莊がミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの1つ星を獲得。さらに、地域内の行事にとどまっていた伝統の鵜飼を全国発信できるコンテンツへと大きく成長させるなど、大洲市の重要な着地型コンテンツが次々とブラッシュアップさ



大洲城復元10周年(平成26年)で披露された、市民がつくる「大洲城鉄砲隊」の演武

れ、評価を高め、改めてその素晴らしさが発信されていった。

すべては偶然に整ったことでなく、その背景に関係者の並々な努力が隠されていることは容易に想像される。それが前述の《翁旅》の事例などへと結び付いていく力にもなったのだろう。

大洲市が直面する 今後の課題と楽しみ

町並み博の成功を機に、大洲市で積極的に進められているのが、隣接する内子町・宇和町(西予市)との広域連携の取り組みだ。

大洲市は城下町、内子町は宿場町、宇和町

は門前町と宿場町の性格をあわせ持つ、いずれも江戸から明治・大正・昭和の町並みを維持しつつ、独自の雰囲気を生かしたまちづくりを実施しているが、町並み博への参加で広域連携の機運が盛り上がり、歩調を合わせながら「南予全体」の魅力を発信し続けている。

大洲が着地型観光地としての魅力をさらに向上させるには「しかるべきレベルの宿泊施設を増やす必要がある」と清水市長は語る。また「今ある地域資源を大切にし、さらなるブラッシュアップも図りながら、四国随一の出荷量を誇る優れた農産品の六次産業化や、『大洲ええモンセレクション』の名称で展開する地域ブランド品の創生・推進など、やらなければならぬことは山積しています」とも語ることが、そのための素材は非常に多彩で、恵まれている。

ただし、肱川の洪水対策は、この川とともに生きる大洲市にとって永遠の課題だ。自然の景観を維持しながら対策を進めなければならない。さらに、大洲市の人口の9割は、近接する伊方原子力発電所から



大洲市ゆかりの漫画家・松本零士さんとともに「大洲市きらめき大使」を務める彩風咲奈さん(宝塚雪組男役・大洲市出身)



日本3大鶺鴒のひとつに数えられる肱川の鶺鴒



巨大な長浜大橋を包み込む肱川あらしは世界的に稀な自然現象

30 km圏内に在住することから、震災対策も喫緊の課題として横たわる。加えて全国共通の課題である人口減少化対策としての定住化促進、移住政策の促進に大洲市も苦戦している。

しかし昨年度のノーベル物理学賞受賞者で、大洲市の名誉市民でもある中村修二氏(小学校から高校卒業まで大洲市在住)をして、記者会見の場で「いつかは愛媛に帰ってきたい。可能性は大洲が一番高い」と言わしめた大洲の魅力を一言でいえば、「肱川あらし」の存在が象徴する自然現象が、今もなお歴史的な町並みと一体化して生きている土地柄そのものにあるのではないだろうか。

肱川あらしは晩秋から早春にかけての比較

的穏やかな日に、大洲盆地に発生した大量の放射霧が肱川の河口に向かい流れ下り、海水との温度差で発生した蒸気霧と相まって轟音とともに伊予灘に吹き出す自然現象で、世界的にも希少な、恐らく太古の昔から続く自然現象とされる。肱川あらしは中世から現代に至る大洲の町並みの変遷も見てきたはずだ。

また愛媛国体2017で大洲市はソフトテニス、ソフトボール、カヌーの会場になる。大洲市では現在その準備に余念がないが、2年後の開催時、どのような地域資源が新たにブラッシュアップされて輝きを放ち、遠来の選手や観客たちを迎えるのだろうか。それが今から楽しみだ。

(取材・文 遠藤 隆／取材日 平成27年2月18日)